

Fate/Zero Another Animation heroes

亞武

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

(アニメ見てる人用にはしょつてる部分あります)

Fate/Zeroのサーヴァントをアニメキャラに変えてみました。

初めて投稿するので、至らぬどこもあると思いますが、温かい目で見てください

一応SN等、Fate関連は見て読んでいます

セイバー、アーチャー、ライダー、アサシン、バーサーカーの真名にかかるので、

タグにはつけときません。

付けたほうがいいなら付けますw

## 目 次

1話 英靈召喚（セイバー陣営）	59
2話 英靈召喚（悪）	49
3話 開戦	41
サーヴァントについて	36
4話 オーバーロード	31
サーヴァントについて（セイバー更新）	24
5話 2体で1体の妖	19
6話 斬る	9
アサシン、アーチャーのステータス紹介	4
7話 虐殺と交渉	1

# 1話 英靈召喚（セイバー陣営）

聖杯戦争、日本の冬木という街で行われる魔術師同士の戦争。英靈を召喚し、最後に残った一組が手にすることができる願望機遠坂、間桐、AINツベルンによつてできたもの

その御三家のうちの一つ、AINツベルンの城で聖杯戦争の為に雇われた男、「魔術師殺し」が

切嗣「・・・アイリ、触媒がないってどういうことだい？」

驚いた、また、少し喜んだ顔をして自分の妻、アイリスフイールに尋ねたが・・・

アイリ「大じい様の決めたことよ・・・私にも何がしたいのか・・・」返つてきた返事は答えにならなかつた

切嗣「触媒を使わずとも召喚はできる。そうだね、アイリ」

アイリ「ええ、けど・・・」

切嗣はアサシンかキヤスターを元々召喚しようとしていたのをアシリは知つていて、  
しかし

アイリ「アサシンやキヤスターでなく、セイバーを召喚するように、一応大剣があるみたい・・・」

切嗣「でも聖遺物じやない、確かにセイバーのクラスなら普通に戦えば勝てる可能性が高い、けれど僕が魔術師をしとめた方が早い」

切嗣は内心、アハト翁に雇われた意味を損失し、確実な勝利は得られないとも思つていた

アイリ「でも切嗣、セイバーは最良のサーヴァントよ」

切嗣「ああ、僕との相性は2の次3の次にすればね・・・」

切嗣が魔方陣の前に立つ。魔方陣の前の祭壇には概念礼装でもなんでもない、大剣があるだけ

アイリ「英靈を召喚するのに、こんな単純な儀式で構わないの？」

アイリが問う

人間を超えたサーヴァントを召喚するのだからその疑問は当た

り前だ

切嗣「拍子抜けかもしれないけどね、サーヴァントの召喚にはそれほど大掛かりな降靈は必要ないんだ。」

切嗣が説明しながらも作業に取り掛かる。そして少し経つてから切繼は立ち上がり、詠唱を開始した

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ

閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。

繰り返すつどに五度

ただ、満たされる刻を破却する

Anfang（セツト）

——告げる

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ  
誓いを此処に

我是常世総ての善と成る者、我是常世総ての惡を敷く者

汝三大の言靈を纏う七天

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——

魔方陣が光り輝き、立っていたのは、黒いフルプレートに身を包んだ2本の大剣を持つ男か女か、背丈や格好からして男だと考えた二人。

その男が問う

男「問おう——汝が私のマスターか」

切嗣「そういう君はセイバーのサーヴァントか？」

男「そうだとも言えるし言えないとも言える。本来ならキヤスターなのだろうが……あまりにも強力すぎるのだそうだ。令呪を用いれば、その姿を挾めるだろうな。それに私はそちらのサーヴァントとは少し勝手が違うのでね。」

切嗣「2つのクラス持ちか・・・アイリ、僕らはとんでもないものを召喚してしまったかもしないね。」

切嗣がその口元を歪めた。

## 2話 英靈召喚（悪）

「よおし！今日こそは絶対に負けないからね！」

辺りを見回し、クルミの冬芽を探しながら楽しそうにはしゃぐ女の子。アイリスフイールにそつくりなその子は、切嗣とアイリの娘。イリヤスフイール。

切嗣「お、見つけた」

イリヤ「嘘!? どこどこ!? 私見落としてたりしてないのに！」

イリヤが切嗣のとこへ走り、辺りを探す。

切嗣がしゃがみ、冬芽を指差し

切嗣「今日一個目のクルミの冬芽だ、フフツ、先取点だな」と楽しそうに笑い立ち上がる

イリヤ「ま、負けないもーん！」

イリヤも負けじと走り、クルミの冬芽を探す。

父と娘の微笑ましい光景をフルプレートに身を包んだ剣士が腕を組み、少し不満げに城から見ている。

アイリ「セイバー、何を見ているの？」

アイリが紅茶を持つて部屋に来た。

セイバー「ああ、マスターが外でたわむれていたのでな。」

アイリ「意外だった？」

セイバー「私のマスターは少し冷酷な印象があつたのでな。自分の娘や家族にも冷たいと思っていたのだが……」

アイリが紅茶を入れる。

アイリ「うつかりしてたわ……セイバーは飲み食いが必要なかつたわね……」

召喚時、セイバーの素顔を見た。いや、あれは素顔と呼んでいいものではなかった。

セイバー「ああ、すまない。マスターがご息女にでも飲ましてあげてくれ。」

セイバー（実はいい人なんだろうなあ……聖杯にかける願いもお



だろう集団。

ただ、その一人一人が並々ならぬ力を持つてすることは、綺礼でもわかる。

その中の一人、黒い髪と赤い瞳を持つ女が大量の肉を食べ終え、こちらを向く。

女（黒髪）「すまない、サーヴァントには食事はいらないのは知っているが、皆食べるのがすきなんだ。」

そして緑の髪の、ゴーグルのようなものをつけた少年が口の中にあらものを飲み込み、喋りだした。

男（緑髪）「いやあすまねえな、マスターさん。ここいらに狩りに行つていいんだつたら自分らで獲りに行くんだがなあ・・・そうもいかないだろ？」

そして、角が生えた男が厨房からまた大量の料理を持って來た。

男（角）「あまりマスターを困らせるものではない。」

それに賛同するかのようにうなずく銀髪の眼帯をし、タバコを咥えている女性。おそらく角の男を抜けば最年長だろう

アサシン達が一瞬で食事をやめ、いつでも戦闘できる準備をし、時臣の背後に視線を送る。時臣の背後には、赤い、コートと帽子を被り、サングラスをかけた男が立っていた。

男「なんだ、暗殺者共。私達は協力関係ではなかつたのか？」

男から発せられる一言一言が、この場にいる者すべてに酷く重く感じさせる。

時臣「アーチャー、昼間なのに外に出て大丈夫なのか？」

アーチャー「それには及ばん、マイマスター。私は日光が嫌いなだけで死ぬほどではない。それよりもだ、いつだ、いつ私は戦える。いや、それよりも私と戦える者はいるのか？聖杯戦争は。なんならそこ

の暗殺者共と戦うしかないのだが」

アーチャーはアサシン達を一瞥し、好戦的な笑みを浮かべる。

時臣「大丈夫だ、もうじきだ。もうじき粹が埋まる。」

時臣は微笑んだ。勝利への確信を持つて。

## キヤスター陣営

男「閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。（みたせ）。閉じよ（みたせ）。

歌いながら詠唱を唱える男。血で魔方陣を書いているが、その血は自分のものでもない、家畜のものでもない、ごく普通の、人の血によるもの。横に転がっている男と女だつたもの。そして縛られている子供。

男「♪」

魔方陣が輝きだす。そこには、全裸で髪や爪が長く、人生というものをあきらめたような絶望した顔の男と、テレビでよく見た少年と少女にそつくりな2人がいた。

キヤスター「あー、なんだ、あんたがオレのマスター??おれはキヤスター、あんちやん名前は何よ」

龍之介「えと、雨生龍之介つす：職業フリーター、趣味は人殺し全般、子供とか若い女が好きです」

キヤスター「ああうん、契約成立。」

龍之介「まあとりあえずお近づきに御一献どうですか？アレ食べない？」

アレ、と指差した男の子が一生懸命にもがく。無駄だと悟りながらキヤスター「んん・・・」

キヤスターが動き、少年に近づく。そのときに、少しキヤスターから光が出た。キヤスターが少年の真下へ来た。来てしまった。すると、キヤスターがお供の二人に目線で指図した。そのとき男の子のガムテープが切れ、口にあつたタオルが取れた。

キヤスター「大丈夫か？」

龍之介がつまらなそうな顔をしながら見ているのがわかる。少し不満のため息も聞こえた。

キヤスター「立てるか？あそこから外へ出れる。一人でいけるだろ？」

少年はうなづき、龍之介を無視しドアへ向かつて走つていった。

龍之介「なあ！ちょっと！」

するとキヤスターは口に人差し指をあて、静かにするようにした。  
男の子はいまさつきいた部屋が暗く、廊下の明かりが目にしみたのか、少し呻き、そして玄関に向き合う

その瞬間に

まねきねこが男の子をつかみゆつくりと握りつぶした。

キヤスター「恐怖には鮮度がある、怯えれば感情は死ぬ。真の意味の恐怖は希望が絶望に変わるその瞬間のときだぜ。」

龍之介「ンンツ！ COOOOOOOOOOOOOOOOL！ 最ッ高だ！ 超COOLだよあんたア！ OKだ！ オレはあんたについていく！ さあ殺そう！ もつともつとCOOLな殺しつぶりで、オレを魅せてくれ！」

キヤスター「おお、理解あるマスターを得られたのは幸先いいなあ・・・」

龍之介「そういえばオレまだあんたの名前聞いてない」

キヤスター「名前？ この時代つていうかこの世界じやあアレは起こつてないみたいだし・・・ そうだ、「かみまる」とでも呼んでくれ」手を握り合う二人は不気味に微笑んだ。

### 3話 開戦

日本

アイリ「ここが切嗣の生まれた国・・・」  
アイリが飛行機から出る。

それと一緒にセイバーが霊体化してアイリと一緒に飛行機から出る。

セイバー（金持ちはやっぱり凄いなあ・・・僕じゃあ貸切なんて一生乗れなさそうだ）

アイリ「セイバー、飛行機はどうだつたかしら？」  
感慨に浸つていると、アイリが小声で話してくる。

セイバーは見た目が現代人ではない、そのため、アイリの疑問ももつともだつた。しかし

セイバー「私は聖杯から現代の知識は一通り与えられているし、現物だつて見たことがある。こんな見た目だが現代人なんだ、私は」  
アイリが驚いた顔をする。セイバーとなるぐらいの剣士で、しかもキヤスタークラスにまでなれる現代の魔術師など、聞いたことが無い。

セイバー「意外だろ？私は本来なら普通の人間なんだよ。ただ少し、未来からだが」

アイリ（何者なのかしら・・・セイバーは・・・）

アイリはセイバーに対する好奇心を高め、空港を後にし、その後日本という国ができるだけ多く楽しんだ。

少しでも悔いを残さないように・・・

とあるホテルの703号室を切嗣が決められたりズムでノックする。

するとすぐに一人の女性、久宇舞弥がドアを少しあけ、切嗣が辺りを見渡す。

切嗣が入り、舞弥は周囲を見渡してすぐドアを施錠し、切嗣に言い渡された仕事をこなしたこと、アイリが冬木に到着したことを報告す

る。

切嗣「わかつた……」

短い返事で返し、届けられた武器を確認する。

切嗣「…………そこのワルサーよりも、イリヤの体重は軽いんだ……もう、8歳になるのに……」

舞弥「……今、必要なことだけに意識を向けてください……」

舞弥が切嗣の首に腕を回し、切嗣にキスをする。

舞弥「余計なことは、考えないで……」

切嗣に対しては恋心などない。ただ切嗣の部品であろうとする。

夜、冬木大橋の上に四つんばいになつてている魔術師、ウエイバーと、港を見ている男、ライダーがいた。

ウエイバー「ライダー……早く……降りようこ……早く！」

涙目と震えた声で、ウエイバーはライダーに懇願していた。

ライダー「何を言つてる、マスター。見張りにはおあつらえ向きな場所じやないか。」

ウエイバー「帰りたい……イギリスに帰りたい……」

ライダー「お、状況もようやく動き出しそうだぞ、マスター」

ウエイバーも余裕が無い顔で港を見る。

港に白い髪、白い服を着た女性、アイリと、靈体化を解き、黒いフルプレートの甲冑に身を包み、背中に2本の大剣を背負つたサーヴァント、セイバーが共に歩いて、魔力の主を探す。

「よおく來たじゃねえか。今日一日、ずっと飛び回つてこの町を探しほつてみたが……どいつもこいつもコソコソと隠れてやがる。ワシの誘いに応じたのは……見た目からしてセイバーってどこか？」

虎のような金色の体と黒の模様、太い腕、長い金色の髪を持つた獣が、宙に浮いて出てくる。

それと同時に、セイバーはアイリの前に立つ。

セイバー「ああ、そういうお前は何のクラスをもつて現界した」

「ワシか？ワシはランサーだとよ」

金色の毛並みを持つ獣がランサーと答える。しかし

セイバー「槍を持つてはいないようだが？」

ランサー「こっちにも色々とあるのよオ」

ランサーが笑いながら答え、構える。

それと同時にセイバーが2本の大剣を抜き、構える。

アイリ「セイバー、気をつけて……私でも治癒魔術くらいは……」

セイバー「必要ない。ただ、相手のマスターの姿が見えないからな、気をつけていてくれ。」

アイリ「わかつたわ、セイバー。この私に、勝利を！」

セイバー「勿論だ。」

ランサー「お喋りは済んだかよ」

いい終わると同時に、ランサーが突撃してくる。武器は無い。

セイバーは2本の大剣で軽々と突撃してくるランサーへ切りかかる。しかし

ランサーの髪が剣のよう銳くなり、大剣を受け止め、一歩下がり、青白く光り、

セイバー「!？」

ランサーから雷が飛んできた。それを右の大剣で防ぐ。今度は口から火を出す。防ぐ。

セイバーの硬さにランサーもイラついたのか、長い毛で攻撃する。セイバーは防ごうとするが、あらゆる角度からくる毛の攻撃は防ぎようが無く、攻撃を喰らう。

しかし、セイバーにはかすり傷を負わすことさえない。

セイバー「火と雷、しまいには髪の毛まで攻撃してくるとはな。だが、当たらなければ意味が無い、当たつても威力が分散された攻撃では傷一つつかんよ」

ランサー「その鎧からはたいしたモンは感じねえし……オメエの

動きも素人同然だぜ……何か隠してんだろ」

セイバー「確かに、今の私はたかだかLV30程度でしかない。だ

が、今はそれで十分だ

ランサー「？何訳のわかんねえこと言つてんだ」

ランサーが再び火炎を吐く。セイバーは防ぎながら、ランサーの動きをずっと観察し、対応していった。

しかし、ランサーの火炎と電撃の同時攻撃で火炎は防ぎ、電撃が当たる。

アイリ「セイバー！」

アイリが心配し叫ぶ。が、セイバーにはダメージが入つてなかつた。

ランサー「マジかよ・・・」

流石のランサーも動搖を隠せないのか、少し引いている。

セイバー「終わりか？なら次はこちらからいかしてもらう」  
およそ全身鎧を纏い、2本の大剣を持っている動きとは思えぬ速さで、ランサーに突撃していく。

ランサーが毛で防ぐ、が、毛は大剣を止められず、腕でガードをする。腕は宙を舞い、ランサーから切断されたことがわかる。

セイバー「なんだ、やはりその程度か」

セイバーがとどめを刺そうとした瞬間、コンテナの上に槍を持つサーヴァントが現れた。

セイバー「何？ランサーが2体だと？」

ランサー（？）「待たせたな！とら！」

「とら」と呼ばれた金色の獣がニヤリと笑う。

とら「来るのが遅えぞ！うしお！」

うしおと呼ばれた長髪の男の子が笑う。

セイバー「2体で1体のサーヴァントか・・・」

うしお「とらをここまで追い込むヤツだ・・・最初つから本気で行かしてもらうぜ」

槍を構え、うしおがセイバーに向かつて攻撃を仕掛けると同時に、どちらが毛で攻撃してくる。

セイバーは右の大剣で毛を切り、左でうしおに斬りかかろうとする。が

うしお「遅え！」

うしおは大剣を避け、セイバーと肉薄する。セイバーが避ける時間が無くなる。

セイバーに攻撃が、槍が当たる。とらの時とは違い、セイバーにダメージが入る。

セイバー「その槍…まさか」

うしお「この槍でダメージが入るつてことは…妖怪の仲間か」すると港に声が響く。おそらくはランサーのマスターだとわかる。

「宝具の」

その時、セイバーに向かう黒い塊。

セイバーの持つ大剣よりも大きな大剣。

しかし、それは剣というにはあまりにも大きすぎた。ぶ厚く重くして大雑把すぎた。それはまさに鉄塊であった。

セイバーがそれに気付き2本の大剣でガードする。

しかしそれはガードなど無いかのようにセイバーを吹き飛ばす。

うしお「またサーヴァントか！」

とら「あいつを吹っ飛ばす攻撃だ…獣の槍でも当たつたらどうかわかんねえぜ、うしお」

鉄塊を持つ黒い甲冑の男はセイバーの方を見る。セイバーの2本の大剣を折った感覺は無い。おそらく、自分が今まで戦ってきたヤツらよりも強いかもしない、と男は思った。

アイリ（恐らくバーサーカーね。セイバーが2体はおかしい筈。けどバーサーカーはもつと理性がないものだと思ったのだけど…）

バーサーカー「どうした？バケモンとガキ、かかつてこい。同時に相手して」

セイバー「よそ見はしない方がいい」

セイバーが吹き飛ばされたコンテナから丁度バーサーカーがセイバーに突撃してきたのと同じスピードで突撃する。セイバーは魔力放出無しで、筋力のみでバーサーカーに2本の大剣を右斜めに斬りかかる。

バーサーカー「!」

バーサーカーが大剣でガードするが、3m程バーサーカーが押される。

そしてそこに猛スピードで来た車がバーサーカーに向かつてきた。

ウェイバー「うわあああああああ！ぶつかるぶつかる！」

ライダー「大丈夫だマスター！」

車から2つの影が飛び出す。しかし車の勢いは止まらず、バーサーにぶつかり、爆発した。

ウェイバー「

ウェイバーが胃の中のものを吐き出し、ライダーがうつとりしながら何かを言っている。

バーサーカーが火の中から出て、ライダーに殺意を向けた瞬間。港の灯りが全て消え、サーヴァント達が集まっている場所にコウモリが飛び交う。

そして空には、赤い服、両手に白と黒の銃を持つている男、アーチャーがいた。

アーチャー「クツクツクツいい夜だ。さあ、私を打ち倒す者は誰だ？」

圧倒的威圧感。この場にいるサーヴァントのどれよりも死の臭いがする。アーリの本能がこの場から逃げたいと判断する。

「爺に聞いていた通りあれが時臣のサーヴァントか…殺せ！バーサーカー！」

バーサーカー「仕方ねえな、行くぜ」

バーサーカーの雰囲気も変わる。地獄の番犬かのように。その瞬間、バーサーカーがその場から消える。そして、アーチャーが両断される。

ウェイバー「な、なんだよ…コレ…アーチャーはもう死んじやつたのかよ…あんなのに車ぶつけちゃつたのかよ…」

ライダー「いや、まだだ。アーチャーはまだ生きてる」

アーチャー「いいぞ、狂犬。この私を殺しつくしてみせろ」

アーチャーに血が集まり、再生する。そして両手の銃で、バーサーカーを撃つ。

黒い銃から出た弾だけが、バーサーカーの甲冑を貫き、肩に1発入る。が、バーサーカーは止まらない。

バーサーカーがまたアーチャーを斬る。

斬る、撃つ、斬る、撃つの繰り返し。バーサーカーは理性を失いガードをせず、アーチャーは斬られても死はない。

急にアーチャーが少し不機嫌な顔をし、手を止める。おそらくマスターから退くよう言われたのだろう。

アーチャー「ここまでだ、次も楽しみにしているぞ」

笑いながら消えるアーチャー。残るバーサーカーも消える。

ライダー「あとはアサシンとキヤスターだけだな。どうだ、今日はここまでについてことで」

「そうか、よりによつて貴様か」

ウエイバー「ツ！」

ウエイバーが小さくなる。

「一体何を血迷つて私の聖遺物を盗みだしたかと思つてみれば……まさか、君自らが聖杯戦争に参加する腹だつたとはね。ウエイバー・ベルベット君」

ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。時計塔で魔術講師をし、ロード・エルメロイの二つ名を持つ、天才魔術師

ウエイバーの師である

ケイネス「君については、私が特別に、課外授業を受け持つてあげようでないか。魔術師同士が殺しあうという本当の意。その恐怖と苦痛を余すことなく教えてあげるよ……光榮に思いたまえ」

ライダー「魔術師！ウエイバーに成り代わつて俺のマスターになる気だつたらしいが、俺のマスターだつたら、俺と一緒に速さを分かち合うべき、そう思うね。姿を晒す度胸もないようなヤツが、俺のマスターより下な訳ないだろ。」

ウエイバー「ライダー……」

自分が、ロードという称号をもらつた自分が、ただの学生に劣つているとライダーに言われる。ランサーのマスターが不機嫌になる。うしお「俺からも今日はここまででいいと思う。」

うしおの髪が消え、短髪になる。長い髪でわからなかつた顔が良くな見える。

おそらく中学生なのだろうか、まだ顔は幼い顔をしていた。

セイバー「そうだな、ここで全員倒しても構わんが、それでは面白くない。それに、ここでは条件が悪い。万全を尽くし、倒した方がいいからな」

セイバーも余裕を持つて答える。

そうして、サーヴァント達は解散した。

こうして、1日目の聖杯戦争は終わつた。

明日からはもつと激しくなるのだろうとアイリは思う。

切嗣がコンテナの陰に隠れる。

切嗣「舞弥、そつちからバーサーカーのマスターは視認できたか？」

舞弥「いいえ。見当たりません」

切嗣「そうか・・・」

切嗣がライフルのスコープを覗く。コンテナを運ぶクレーンの上に、アサシンと思われるもの。

髪が長く、刀と思われるものを持つ女。

しかし、もう一人女がいる。

切嗣「アサシンまで複数人のサーヴァントか・・・厄介だな。」

自分のサーヴァントが1対多は有利でないことは今回の戦いでわかつた。

いくら自分のサーヴァントがハイサーヴァントであるとはいえ、複数人では勝ち目が無い。

切嗣（あんなに攻撃を受けてもほぼ無傷で、あれだけ派手に戦つても魔力消費が無いなんて・・・どれだけの英雄なんだろうな・・・奥の手でできればまとめてサーヴァントを葬りたいものだが。）

雁夜「ぐッ！」

フードを被り、刻印虫に犯された顔、髪を隠す雁夜。しかし、その

代償は大きく、バー サーカーを使役した結果、吐血する。臓 研にも言われたが、聖杯戦争を勝ち抜いたとしても、すぐに死ぬ。

だが、雁夜はあの二人の姉妹の為、間桐の魔術に桜が染まらないために一刻も早く勝たなくてはいけない。

特に遠坂時臣。自分の娘をどうなるかわかつていて間桐に差し出したあの男だけは自分の手で殺さなくてはいけない。

雁夜「待つてろよ・・・桜・・・」

龍之介「すっげえ！まじにすげえ！」

血まみれの地下のどこかで快楽殺人鬼の雨生龍之介が頬を赤らめ笑う。

龍之介「なあ！かみまろの旦那！アレって全部マジなんでしょ!? SFでもなんでもないガチだつたんでしょ!?たまんねえ～！！！！で聖杯戦争だつたけ？旦那も今のアレにかむんでしょ！！！！！！旦那？」

ついさつき起きた港での出来事を見ていた龍之介は楽しそうに笑う一方、かみまろは怪訝な、苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

かみまろ「ライダーもそうだが、ランサー、うしおか。ありやあ俺の嫌うヤツだ。何かに情熱を持つてる。俺とは違うヤツ。俺を理解できないヤツ。まだ人なヤツ。」

かみまろはランサー、ライダーを指差す。特に嫌そうのがセイバーだった。

かみまろ「セイバーはなんか特にひつかかりを感じるんだよなあ・・・明日にでも襲撃するかあ・・・」

と言つて、かみまろは近くの高校を探し始める。

かみまろ「さあて、あの再現をするかな」

かみまろの宝具は基本使い魔を召喚することであり、その使い魔は強さに応じて、色々と再現が必要になる。

再現するたび、経験値が溜まる。そのLVに応じてかみまろは召喚できる使い魔の強さが変わってしまう。

しかも、龍之介はかみまろの宝具、「神の力」で少し力を授かっているため、趣味として今でも殺しを続いている。

そして、

今地下で行われたのは、すなとり・かごめかごめ等の遊び。3匹の猿、謎のこけしが使えるようになつた。

この再現で得られた使い魔は、まだ弱く、戦力としては心もとないもの。

しかし、召喚されてから再現を繰り返し、経験地が溜まり、召喚できるLVがあがり続けて、今までの最強戦力は、天狗のお面を3つつけた男、獅子舞、武者等である。

明日の朝には報道されるであろうこの行動は、正規な魔術師ではないからこそ起こりえたことであり、言峰璃正による監督役が目をつけ るのも時間の問題。

明日、再現がすべて終わる。人形を着た少女、アシッド・マナは笑う。

アシッド・マナ「地獄編はじめよ」

## サーヴァントについて

ランサー

「うしお」

獣の槍の所持者。「二体で一体の妖（バケモノ）」であるため、今回の召喚にはどちらも一緒に召喚された。

絵を描くことが好きなため、芸術審美のスキルを持つが、うしおが独特のセンスを持っているため、共感しないものにはスキルは発動しない。

筋力	B	魔力	E
耐久	B	幸運	D
敏捷	A+	宝具	EX
宝具			

「獣の槍」 ランクEX

対妖宝具 レンジ：1～100

あらゆる魔を打ち払う槍。

妖怪が集まつた布により力が制限されているため、ランクはBとなるが開放したときにはランクはEXとなる。

布を取るほど、ランク、力は上がるが、消費魔力は倍になつていく。封印を取り、戦い続けると・・・

「？」 ランクB

スキル

頑強 A

怪力 B

変化 A+（狂化A+付与）

戦闘続行 C 対魔力 C

「どら」

筋力 A 魔力 E  
耐久 A 幸運 E  
敏捷 B 宝具 B

「？」 ランクB

スキル

怪力 B 戰鬪続行 EX  
變化 D 妖術 B

キヤスター

「神小路かみまろ」

とある世界線で大量虐殺を行なつた人物であり、世界を混沌に陥れた。

常に髪、爪を長く、全裸でいる。

筋力 E 魔力 EX  
耐久 E 幸運 EX (本人はEとしている)  
敏捷 E 宝具 A +

「神の力」 ランクE ~ A +

対人宝具 レンジ1~100

思い込んだものを具現化する能力。

かみまろの場合、絵に描いて表現し、キャラクターを使い魔として呼び出せる。

使い魔の能力は上下するが、どれも人を殺すことには問題ない力を持つている。

人に少しだけ授けることもできる。

アシッド・マナ

かみまろについた少女。

戦闘能力はなく、今回はただの傍観者として英靈の座に無理やり入り込んでついて来た。

セイン・カミュ

アシッド・マナと同じ。

スキル

精神汚染 A

芸術審美 D

陣地作成 D

セイバー

???

黒のフルプレートの甲冑、大剣2本を持つセイバー。だが、とある条件を果たせば、領地内だけ令呪なしでキャスターへと変わることができる。

領地外では令呪を用いることでクラスを変えることができる。

スキル、宝具共に、最高ランクのサーヴァントであり、ハイサーヴァントとも呼ばれる。願いは盟友と共にもう一度冒険することだが…：

筋力 A+ 魔力 A++

耐久 A+ 幸運 E

敏捷 C 宝具 EX

宝具 EX

???

ランクEX

陣地作成 A 黄金律 B

対魔力 A+ カリスマ B

無辜の怪物 E 戰略 A

直感 C 自己改造 C

ダブルクラス A 高速詠唱 D

道具作成 C

ライダー

???

派手な男。速さを求める聖杯戦争に参戦したが、自身が最速であることは疑つていなかったため、現世で速さを感じたいがために参戦する。

筋力 B

魔力 C

耐久	C	幸運	B
敏捷	EX	宝具	B
宝具	???	ランク	B
対人宝具	レンジ1	対象人数	1人
スキル	???	バーサーカー	魔力 E
騎乗	B	対魔力	C
変化	B	カリスマ	E
狂化	E	覚醒者	E
筋力	A++	魔力	E
耐久	A++	幸運	E
敏捷	A	宝具	A++
宝具	???	ランク	A++
対人宝具	レンジ1	対象人数	1人
筋力、耐久などのステータスをあげることが可能。			
しかし、狂化Aを付与するため、敵味方関係なく襲うようになる。			
マスターだけは見分けがついているのか、襲うことはない。			
ダメージを受けても、この宝具が発動している間、痛覚を遮断する。			
しかし、宝具を解除するとそれまでのダメージを受けることになる、諸刃の剣。			
???	ランク	B	

対魔宝具 レンジ1～10 対象人数1～

分厚く、鉄塊のような武器。

たくさんの魔を切つてきたことにより、一種の魔剣と化している。

そのため、魔に対する攻撃力は上がる。

ランサーの獣の槍とはまた違い、魔物に對して有利になるくらいのもの。

また、神性特攻にもなる。

スキル

頑強 A+

騎乗 B 対魔力B

怪力 A++

戦闘続行 A 仕切りなおし A 鋼鉄の義手 B

狂化E（宝具発動時EX）

## 4話 オーバーロード

ある冬木のホテル。そのスイートルーム。

赤毛の女、ソラウと金髪の男ケインズ。そして金色の獣「どら」と槍を持った中学生くらいの男の子、「うしお」。  
うしお「すまねえな・・・マスター。」

うしおがケインズに謝る。

ソラウ「ランサーはよくやつたわ。・・・ランサーだけに結果を急がせてあなたは後ろでずっと隠れて・・・」

うしお「これ以上はダメだよ、ソラウの姉ちゃん。」

ソラウがケインズに対する会話は、婚約を約束した者同士の会話ではなく、冷め切つたものだつた。

ホテルのベルが鳴る。少しして、電話が鳴り、ケインズが受話器を手に取る。

ケインズ「・・・・わかつた。」

短く返事をし、受話器をすぐ元に戻す。

ケインズ「下の階で火事だ。まあ、間違いなく放火だろうな。」

ソラウ「放火? よりによつて今夜?」

ケインズ「人払いの計らいだよ」

ソラウ「じゃあ・・・襲撃?」

港の倉庫街で起きた初戦。セイバーに対してうしおの持つ槍だけが攻撃を与えられる。

ランサーの宝具は魔術の隠匿が難しいもの、自身が纏うもの。そして槍の3つ。

ランサーは初戦では宝具を使っていない。それで最良のサーヴァントセイバーと互角に打ち合えたのだ。

今油断しきつていてる状態を狙いセイバーのマスターは、早々にランサーを脱落させたいのだろう。

ケインズ「フツ、セイバーのマスターは可能な限り早急にセイバーにダメージを与えられるランサーを脱落させたいと見える。ランサー、下の階に降りて迎え撃て。・・・無下には追い払つたりはする

なよ。」

とら「おう」うしお「わかつたぜ」

ケイネス「お客様にはケイネス・エルメロイの魔術工房をとつくりと堪能してもらおうではないか。・・・フロア1つ借り切つての完璧な工房だ。結界24層、魔力炉3基、獵犬代わりの悪霊、魍魎数十体、無数のトラップに廊下の一部は冥界化させている空間もある。お互い秘術を尽くしての競い合いができるというものだ。」

ケイネス「私が情けないという指摘、すぐにでも撤回してもらうよ」ソラウ「ええ、期待してるわよ。」

ホテルのフロア1つが、並の魔術師ではできないようなものばかり。天才であるケイネスは万全を期した状態でソラウにいいところを見せたかった。

しかし、ホテルは爆発した。

切嗣「150mからの高みの自由落下。どんな魔術結界で防備を固めていても、助かる術はない。」

ホテルの外に集まる人々。おそらくホテルにいた人々の中に、切嗣はいた。

舞弥が外からケイネスを見張り、切嗣が爆弾を起動させる。

ホテルの爆発を見る人々。その人々野中に女の子が泣き、それを母親がなだめている。

切嗣はすこしそれを見て、無線で舞弥に撤退の指示を出す。しかし無線からは発砲の音が聞こえただけだった。

ホテルの近くの建設途中のビル。舞弥がケイネスを見張っていた場所に、若い神父が一人。

綺礼「それにしても、建物もろとも爆破するとは、魔術師とは到底思えんな。いや、魔術師の裏をかくことに長けているということかな？」

舞弥「言峰綺礼……！」

綺礼「君とは初対面の筈だが？ それとも、私を知る理由があつたのか。ならば君の素性にも予想がつく。」

舞弥「ツ！」

舞弥が舌打ちをする。サーヴァント抜きでもこの男は強い。自分では到底勝てない相手だとわかる。

綺礼「私にばかりしやべらせるな、女。返答は一つだけでいい。お前の代わりに来るはずだった男は、どこにいる!?」

その一瞬、柱から身を出し、持っていたハンドガンを撃つ。しかし、一瞬ではじかれてしまう。拾う時間など無い。前転し、隣の柱に移る。

綺礼「なかなか悪くない動きだ。相當に仕込まれているようだな。柱に近づきながら、両手に黒鍵3本ずつ構える。

しかし、どこからか投げ込まれたスマートクグレネードのおかげで、飛び降りる。綺礼は即座に反応し、切り込む。1秒でも遅かつたら舞弥は首が胴体と分かれていただろう。

綺礼「あの女が投げたものではないか……まあいい、あの女を助けるという存在がいたということだけで、今夜は収穫だ。」

綺礼「表ではみだりに姿を晒すな、と言つておいたはずだが？」

アサンシン「いやあ、ついにキヤスターの居場所がわかつたもんね。今すぐに言つておかなきやいけない情報つしよ、これ。」

綺礼がすぐに時臣に連絡する。

キヤスターとそのマスターは深山町から隣町の高校で、世間を騒がせる大虐殺を行なつた人物であること、配慮なく魔術の行使、痕跡の秘匿すらなし。

綺礼「もはや聖杯戦争自体眼中に無いのかと」

時臣「錯乱して暴走したサーヴァント、それを律することないマスターか……一体どうしてそんな連中が聖杯戦争に……」

璃正「これは放任できんでしょう、時臣君。キヤスターたちの行動は明らかにルールを逸脱している」

時臣「無論です。私は魔術の秘匿に責任を負う者として、断じて許せない。」

璃正「んん、キヤスターとそのマスターは排除するほかあるまいな。若干のルール変更は私の権限の内です、すべてのマスターをキヤスター討伐に導引しよう。」

キヤスターが行つた虐殺は、既に50人以上の無辜の人々が犠牲となつてゐる。その他にも、誘拐された人々もいる。最早キヤスターは災害と化しているのだ。

しかし、その夜にはキヤスターの計画は既に最終段階で手遅れだということをまだ知らない。

セイバー「ここか」

日本には余りにも似合わない風景。それもその筈、セイバーの目の前には城があり、それが自分達の拠点であるからだ。

アイリ「どうかしら？ セイバー、ここならあなたの宝具を発動できると思うのだけれど……」

セイバー「ああ、このぐらいの城ならば3割くらいか……」

セイバーの宝具は固有結界であり、発動条件は広い土地、龍脈の流れがあるところになる。

そして、一番の問題が、その場所はかなりの金額がかかつた場所でなくてはいけないのだ。

金銭の代わりに魔力、聖遺物で代用も可能だが、その聖遺物はまだ届いていないのだ。勝つつもりがあるのでだろうかとセイバー、切嗣、アイリまでも呆れる。

切嗣「届く聖遺物はかの騎士王の鞘、アヴァロン、だつたか。再生効果でセイバーの強化にも使える、と」

セイバー「それが私の宝具を完全にする程の物か……興味はあるが、必要ないな。勝つなら守護者2人だけで十分だ。マスターが持つておくといい。」

セイバー「そもそもマスターはじつとしてくれて構わない。私だけで十分だ。……それと、この森も使わしてもらうが、構わないか？」

切嗣「僕がマスターを仕留める計画。それをいきなり切り替えろというのも無理だ。それに、サーヴァントを倒してもマスターが生きて

いれば、他のサーヴァントと契約すること、新しくサーヴァントを召喚する者も出てくる。」

セイバー「ならばこれを持つておくといい。危なくなったら吹けば、使い魔が出てくる。サーヴァント相手なら数秒は稼げるだろう。」  
セイバーが空間からアイテム（笛）を取り出し、切嗣とアイリにも渡し、赤い液体も渡しておく。

セイバー「もし、魔力が枯渇するようなら飲むといい。傷も癒える。」

セイバーが渡した数本の赤い液体。切嗣もアイリも固まつてしまつた。

アイリ「こ、これ……靈薬かしら。ここまで完成された靈薬なんて……神代の遺物と見劣りしないレベルよ、これ」

セイバー「何、勝つならこのぐらい。それに、私の持つ物はこれだけではない。本来、10割の力を出せたなら、1日でこの戦いは終わらせれる。前回の戦いでは相手の戦力がよくわかつた。」

城内に向けて歩きながらセイバーが切嗣とアイリに自身が感じた戦力差を述べる。

セイバー「あのなかでも厄介なのがランサーか、あの少年の槍は下手すれば私を一撃で倒す代物だ。宝具も通用しないかも知れない。気を付けなければな。」

切嗣「一撃、か」

アイリ「それに、あの男の子が来たときに獣の力が明らかに強くなつてたのも……」

切嗣（おそらく2人組になることによつてステータスが上がるサー・ヴァントか。厄介だ。アサシン、キャスターもまだ現れていない。聖遺物が来るまで、慎重に事を進んでも問題はない、か）

その時、森に仕掛けていたトラップが発動し、城内にアラームが鳴り響く。

切嗣「付けられていたか……」

監視用の水晶を用意して、警報に引っ掛けたモノを見た時、切嗣が珍しく驚いた表情をする。それと同時に、セイバーまで驚いた声を

上げた。

そこには、桃太郎と、二足歩行するムキムキの犬、猿、雉がいた。

セイバー「サーヴァントではないな、セイバークラスが2人いると  
いうのはあり得ないこと。おそらくキヤスターの使い魔か。」

切嗣「ただの使い魔じやない。アレは… サーヴァントに匹敵す  
る。尋常じやない魔力を持つていてる… セイバー。いけるか?」

セイバー「既に守護者を向かわせた。すぐに方が着くだろう。」

切嗣「何を言つてるんだセイバー、僕の魔力は減つていない。」

切嗣の声が荒らげる。だが

セイバー「魔力は使わん。召喚されたとき、既に我が守護者達は召  
喚されていた。幻靈としてな。」

セイバー「私の宝具は、自らの城内ならば、魔力を少量消費するだ  
けで幻靈1人なら形造れる。守護者を全員現界させれば、それ相応の  
魔力は使われる。それに、私の魔力を用いたのだ。マスターからは  
取つていない。」

水晶玉に映つた昆虫の形をし、白銀の体、4本の腕にはそれぞれ  
違つた武器が握られている使い魔。

自分が呼び出された。至高の御方に信頼されている。ならばその  
信頼に応えなくてはいけない。

「ココヲ通ス訳ニハイカン」

そのとき、森が凍り、猿が両断され、犬が凍り、碎かれ、雉の首が  
胴体と離れる。

桃太郎？「使えねえ奴らだぶえ」

桃太郎らしきモノが喋り終える前に両断される。

その3つの死体が凍る。そして、消える。

「御期待ニ副エタダロウカ…」

十分すぎる結果を残したにも関わらず、その昆虫のような使い魔は  
自分がちゃんと仕事をこなしたのか、不安がついている

切嗣「強すぎるじやないか…」

ただの使い魔の筈。それがあのキャスターの宝具によつて作られ

た桃太郎一味を瞬殺する。

しかも、片手の大太刀しか使つていなし。

セイバー「あれはフロスト・オーラ。周囲を凍らせる・・・どうやら本気で使つたらしいな。」

アイリ「セイバー？ 守護者っていう使い魔は何体呼び出せるのかしら・・・？」

アイリがおそるおそる聞く。

セイバー「守護者ならば7人、守護者と比べ強さは劣るが、戦闘メイドは7人、統括で1人。他にもいるが・・・今は十全にできぬのではな」

アイリと切嗣にセイバーが説明しているとき、セイバーの使い魔が現れる。

「防衛したところと反対方向に敵影です。いかがなさいますか？」

角が生え、腰から黒い翼をつけた美人が背後に現れる。

「オ待タセシマシタ、次ハ何処へ向カエバヨロシイデシヨウ？」

水晶玉の中で暴れていた昆虫型の使い魔が扉を開けて現れた。

セイバー「そういえば、私の名前はモモンガ、と言つたな、マスター。いい機会だ」

使い魔2体にセイバーが

セイバー「ナザリックが威を示せ！」

使い魔2体が「はっ」の声と同時に姿と気配が一瞬で消える

AINZ「私の名前はAINZ・ウール・ゴウン。この名前が私の真名だ」

真名を告げ、フルプレートの甲冑でなく、2本の大剣でなく、黒いローブに身を包み、7匹の黄金の蛇がかくみあつたような杖を、様々な宝石がついた指輪を嵌めている骨の手で持つてゐる。そして、胸に赤く光る玉。

どれもが宝具ランクA以上、EXに届くものだとわかる。

そして、まだAINZは真の宝具を使つていないという恐ろしさ。城の周りのキヤスターの使い魔が、AINZが名乗り終えたときと、掃討されたのは同時だつた。

# サーヴァントについて（セイバー更新）

セイバー

「アインズ・ウール・ゴウン」

真名はモモンガだが、自身が「ユグドラシル」の世界に入り込んだ際、ゲーム内の最強ギルドの一角と言われていたギルド名、を拝借したもの。

もし、ギルドメンバーの誰かに名前を戻せと言われたならば、モモンガに戻すであろう、としている。

宝具

「ナザリック地下大墳墓」 ランクEX

対軍宝具 レンジ1000 対象補足1~1500人

アインズ・ウール・ゴウンというギルドの城。「至高の四十一人」によつて作られた。

1500人という規模のプレイヤーの軍団を倒したことで大軍に有利な特性を持ち

入ってきた部外者、主の機嫌を損ねた者は決して帰つてくることはできない。

「守護者」 ランクEX

対軍宝具 レンジ1000

アインズが召喚された時から、幻靈として周囲にいた者達。全員が宝具を持つ。

ナザリック地下大墳墓で発動することによつて、守護者全員を召喚可能であり、そこからならば守護者は外へも行けるようになる。

しかし、守護者は霊体化できない為隠密行動は不可能となつている。

「コキュートス」

昆虫型の白銀の武人。攻撃力が守護者一。

筋力 A++ 魔力 C

耐久 A++ 幸運 E

俊敏 C+ 宝具 A+

「斬神刀皇」 ランクA

対軍宝具

刃渡り180cmを超える大太刀。

コキュートスが持つ中でも、一番の攻撃力を持つ。

「フロスト・オーラ」 ランクC

種族としてのクラス能力。範囲を伸ばせる。

「アルベド」

守護者を統括し、最高峰の防御力を持つ。

筋力 A+ 魔力 B+

耐久 A++ 幸運 C+

俊敏 B 宝具 EX

「ヘルメス・トリスマギストス」 ランクEX

対物理宝具

アルベドの持つ全身を覆う鎧。物理防御に特化した3層であり、スキルを使うことによつて1層ずつ鎧を壊すことで、どんな攻撃も無効化できる。

本人はこれを用い、AINズの盾になる。

「シャルティア・ブラツドフォールン」

筋力 A+ 魔力 A+

耐久 A 幸運 E

俊敏 A 宝具 A

「スポットランス」 ランクA

対人宝具

これで攻撃したとき、相手に与えたダメージの数割を回復として使うことができる。

また、名前のとおり、相手の血を吸い取ることもできる。

「ブラッドプール」 ランクC

対人宝具

殺した相手の血液を自分の頭上に貯め、相応の量に応じて高位魔法を発動できる。

しかし今回は殺戮が主ではないため、使われることはない。

「アウラ・ベラ・ファイオーラ」

双子の守護者であり、姉の方。

魔獸を操り戦う。

筋力 B 魔力 B

耐久 C 幸運 A

俊敏 A 宝具 B

※宝具という宝具はないが、使役する魔獸によつては、宝具ランクB相当の魔獸も

「マーレ・ベロ・ファイオーラ」

双子の守護者の、弟の方。

純粹な筋力と強化等で戦う。大制圧する魔法も使う。姉との相性はいい。

筋力 A++ 魔力 A

耐久 B 幸運 A+

俊敏 D 宝具 C

「シャドウ・オブ・ユグドラシル」ランクC

対人宝具

一見すると黒檀で出来たただの木の杖だが、マーレが全力で殴ると、サーヴァントの骨を簡単に折ることができる。

「強欲と無欲」 ランクEX

使用不可

「デミウルゴス」

悪魔であり、守護者随一の頭脳を誇る。ただし、戦闘能力ならば一番下であり、主に戦うことを見定していない。

筋力 B 魔力 B+

耐久 B 幸運 A

俊敏 B 宝具 B

「悪魔の諸相」 ランクB

対人宝具

悪魔としての変身能力。

筋力等のステータスを上げることができ、部分的に強化することも可能。

「支配の呪言」 ランクD

対人宝具

自分より弱いものをばデミウルゴスの言葉には逆らえない。しかし、サーヴァントには無意味。音 자체を防ぐなど対処法はある。

「ヴィクトイム」

筋力	E	魔力	C
耐久	E	幸運	D
俊敏	D	宝具	C
筋力	A+++	魔力	C
耐久	A+++	幸運	E
俊敏	C	宝具	

「ガルガンチュア」

「戦闘メイドプレアデス」 ランクA

対人宝具

こちらは幻霊として常にいた訳ではないので、7人姉妹を召喚する際、膨大な魔力を消費することになる。

守護者とは違い、戦闘能力は下がっているが、十分応戦できる実力はある。

「ワールドアイテム」 ランクEX

その殆どが使用不可、制限が設けられている。

「ゴッズアイテム」 ランクA

守護者達が宝具として用いるもの。

AINZ自身は使用不可制限がかけられている。

「パーフェクト・ウォリアー／完璧なる戦士」 ランクA++

対人宝具

本来は魔法なのだが、宝具へと昇華したもの。すべての戦士職の武器を使うことができるようになるが、技量等、様々な面で本職より劣

る。

AINZ・WURL・GOWNのギルドメンバー全員の武器を使うこと  
ができる。

### 「魔法」ランクEX

AINZや守護者などが使うことができる魔法はこの世界の魔法  
とは違い、根源に至つたものではない。

しかし、AINZが用いる中には明らかに「魔法」に近いものまで  
ある。

### スキル

#### 前回と同様

尚、AINZとして戦う場合、セイバーではなく、「オーバーロード」  
というクラスに変わる。

#### その他

- ・刺突武器でのダメージを抑える
- ・斬撃武器でのダメージを抑える
- ・対魔力Aくらいの魔術・魔法に対する耐性を持つ

## 5話 2体で1体の妖

コキュートス、アルベドが使い魔を掃討したのを見る人物が一人と2体。

ケイネス「やれるな？ランサー。今回は宝具の開帳を許可する。存分にやりたまえ」

うしお「ああ、前の戦いの時わかつた、セイバーは獣の槍で倒せる！」

うしおがとらの上に乗り、髪を長くした。そしてうしおととらの周りに石が現れ、うしおととらが身に纏う。そして、槍に付いている赤い布をほぼ取る。

宝具「石喰いの鎧」、そしてとらに付くのは、宝具あざふせ「字伏の鎧」。

とら「久しぶりだなア、寝起きで悪いが頑張つてもらうぜ」

とらが高速で妖気を隠さず森を駆ける先には、白銀の塊がそこにあつた。

コキュートス「ン？何力来ルナ…コレマデノ雑魚トハ違ウ、サー  
ヴァントカ！」

大太刀を構え、迎撃に入る。

その瞬間、雷がコキュートスを襲う。しかし

コキュートス「コノ程度、ダメージニモ入ラン！グツ！」

雷が終わると同時に、衝撃波を喰らい、吹き飛ばされる。そして体制をすぐに立て直すとその衝撃波が飛んできた場所へと一瞬で間合いを詰める。

コキュートス「見ツケタゾ、ランサーノサーヴァント」

うしおととらがコキュートスと相対する。うしおはコキュートスの強さを真正面から受けて、白面の者と相対した時の様な、恐怖感を思い出す。だが、自分の隣にはとらがいる。

石喰いの鎧がある。気を大きく持ち、手に力を入れ、槍を構え、コキュートスを睨み付ける。

コキュートス「強イナ、ココニ来テコノ様ナ強者ト戦エルトハナ。」

下顎を鳴らすコキユートス。相対するサーヴァントが自分と互角に戦える存在だと直感でわかり、コキユートスが腕をうしおとどろに突き出し、魔法を使う。

「ピアーシング・アイシクル／穿つ氷柱」。人間の腕ぐらいある氷の柱がうしおとどろに何十本と襲い掛かる。

うしおが槍を使い、迫り来る氷柱を碎いていき、とらが髪を硬質化し防ぎ、何十本とあつた氷柱はすべて打ち落とされる。

——スバラシイ

コキユートスが斬神刀皇をうしおとどろに横なぎの一閃。

木々が綺麗に寸断され、とらの髪、石喰いの鎧の触手が切断されるが、2人は上空に逃げ、とらが火を吐き、コキユートスにダメージを初めて少量与える。

コキユートスが空中へ跳び、とらに近づき、そして少年がいないことに気づく。

うしお「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

うしおが叫び、槍を前に構え突撃してくる。しかし、

コキユートス「奇襲ナラバ、静力二行ナウベキダナ」

コキユートスがうしおの槍を斬神刀皇で防いだが、うしおが槍を即座に高速の突きへと攻撃を変える。コキユートスが防ごうとしたが、後ろからとらが髪でコキユートスを縛り付ける。

しかし、コキユートスに槍が当たることなく、とらの髪がコキユートスの尻尾で切断され、槍をすべて防いでいく。

髪を切られ、吹き飛ばされたとらが雷撃を放つ。コキユートスはそれが大したダメージ、むしろ効かないと思い、ノーガードで槍のみを捌く。しかし

コキユートス「グツウオ!？」

予想以上のダメージにコキユートスが小さく唸る。今の雷撃はどちらの雷撃だけでなく、「字伏」からの雷撃も含まれていたのだ。

ダメージを受けたコキユートスの動きが少し遅れる。たかが一瞬の隙だが、今のうしおはそれを見逃さず、すかさず間合いを詰め、槍を横に振るう。

しかし、コキュートスは咄嗟に大太刀を構え、槍を受け流し、寸断されなかつたが、完全には受けきれず、右腕が切られる。

コキュートス「マルデアノ時ノリザードマントノ戦イノ様ダ。」

リザードマンの兄弟を思い出すコキュートス。自身が弱者と侮り、攻撃を与えた相手。勿論コキュートスはダメージを受けなかつたが、コキュートスはリザードマンのあのコンビネーションに賞賛を浮かべたのを今でも忘れていない。

ただ、眼前の相手はあのリザードマンの兄弟よりも強い。油断はしないといつもりだつたが、どちらの妖術は自分には大して効果はないと悔つていたのかもしない。

うしお「やつぱり獣の槍は効く・・・けどあの一瞬の隙は・・・」

とら「何言つてやがるうしお、俺様を誰だと思っていやがる、隙なんていいくらでも作つてやる、だからあの虫をぶつ倒すことだけ考えてな。」

とらが作つてくれた隙を自分が無駄にしたと弱気になるうしおにとらが励ます。

そして、顔を前に向け、コキュートスに対して精神を研ぎ澄ます。

コキュートス「腕ヲ切ラレタ・・・失態ダ。」

コキュートスから魔力の放出を感じる2人。恐らく、即座に決着を付ける気なのか、コキュートスが空間から他の2本の腕に武器を持ち、うしおがとらに乗り、シユムナを一撃で倒した時の穿心の心を思い出して相手を貫くことだけを考える。

そして、一瞬。その一瞬で倒れたのはとらだつた。しかし、コキュートスは胸に大穴を開けて一言、「見事」と下顎をガチンと鳴らし消滅していく。

とらは四肢を切断とまではいかなかつたが、両腕は千切れそうになつてている。

咄嗟に魔力を高め、硬質化した髪を前に出し、筋力を上げたのにも関わらず、完全には受け切れなかつたのだ。一方、うしおはダメージこそ無いものの、余りにも強大な敵と戦つたことで死を覚悟し、精神的疲労が蓄積していった。

そして今回戦つたコキュートスがセイバーの「使い魔」であり、サー  
ヴァントでないことに焦りを覚える。

うしお（多分もう一人、こつち側に来てる……しかも今さつきの  
戦つた使い魔と同じ位の強さみたいだ……）

最早恐怖というより呆れている。こんなに強い使い魔を召喚する  
ことができるサーヴァント、本来のセイバーの実力はあの時港で戦つ  
た時とは比べ物にならないであろうこと。

その時、城から死の重圧がかかる。

うしおは、初めて白面の者を見たとき、それ以上の恐怖を覚える。  
とらも流石にこの重圧には耐えられなかつたのか、小さく呻く。

AINZ 「守護者を倒すか……貴様ら、楽に死ねるとは思わんこ  
とだ」

森全体に響く声。その声だけで意識が揺らぐ。

ケイネス（ランサー、動けるか、すぐに撤退だ。）

自分のマスターも城内に侵入しようとしていたが、あのAINZの  
声を聞いたからだろうか、撤退を始めようとする。

恐らく、自分達に向けて言われたからか、ケイネスよりも自分達に  
対しての死の重圧が重かつたのだろう、ケイネスは少しだけしかあの  
重圧を味わつていなかった。

ケイネスがもしあの重圧を受けていたら、死んでいたであろうこと  
をケイネスどうしおととらは知らなかつたのだ。わざと、あえてケイ  
ネスには向かなかつたのだから。

アルベド「申し訳ありません、AINZ様……守護者統括の身で  
ありながら、コキュートスを死なせてしまい、更には使い魔を放つた  
賊、ランサーとそのマスターを取逃がしてしまいました。罰はいくら  
でも……」

AINZ「よい、コキュートスは満足して逝つた。それに、ランサー  
をコキュートスで倒せると思いこんだ私こそが最も責められるべき  
だろう、アルベド。」

AINZベルン城の一番広いところに自身のアイテムの椅子に座

り、威圧を放つて いる人で無いもの、AINZ は、ALBEDO が帰還した直後に謝罪した ALBEDO に無罪を言い渡している。

CUTSIE 「あのランサーも中々のサーヴァント。だが僕らの陣営の方がかなり有利なのは変わらないか・・・」

自分に城でおとなしくしていればいいと言われた時のことを思い出す。

あの映像を見て、「ひょっとして僕いらないんじゃ・・・」と思つてしまつたのだ。

AINZ 「コキユートスを復活させるとなると・・・そうだな、この城では足りん、届く聖遺物を使用してなんとか、というところか・・・残念だがコキユートス復活は無理そうだな・・・」

ランサーの槍、あれがもしもコキユートスの腕を切つたように、胸に大穴を開ける様に自分の魔法防御をすり抜けてきた時は、自分は即座にこの戦争から敗退するだろうと思う。

ランサーのレベルは『ユグドラシル』の世界では Lv100 近いだろう、もしくは全てのサーヴァントがそうであると仮定して動かなくてはいけなくなつた。

AINZ (それでも、絶対に勝たなくてはいけないんだ・・・)

動かない表情でAINZは胸に絶対に勝たなくてはいけない、と自分に言い聞かせ、コキユートスの戦いぶりを思い出しながら、自分が他のサーヴァントに対してもう対処していくのかを考え出す。

## 6話 斬る

ランサーがセイバー陣営に突撃する少し前の話  
ライダー陣営、ウエイバーが使い魔を飛ばし町の惨状を使い魔の目を通して見る。

キヤスターの使い魔（だろう）を掃討する暗殺者達。多くの使い魔が9人のサーヴァントに即座に掃討していく。その9人の実力が、その全てがかなりの使い手、1人1人が強い。

中でも全身鎧風な姿に包まれた大男と同じ鎧に包まれた中背の男、角が生えた男が使い魔相手に無双していく。

サーヴァント相手に引かないような突出した魔力を持つた使い魔が3体ほどいたが、5秒と持たなかつた。

ウエイバー「なんだよこいつ等・・・強すぎるだろ・・・」

ため息と共に自分のサーヴァントを見やり、勝負になつたときに自分のサーヴァントがどこまで通用するのか、というか相手になるのが心配になる。

おそらく1対1でなければ勝てるかわからない、まずアサシン達のコンビネーションでは並のサーヴァントが同数集まつたところで勝てるかわからない。

そういうた不安要素を挙げていく中、アサシン達が使い魔を掃討し終わり、拠点に戻ろうとする。

ウエイバー「あれ？ アサシン達・・・遠坂邸に向かつてる・・・？」

綺礼「早かつたな、アサシン。討ち残しはないな？」  
緑色の髪の青年が答える。

「ああ、ちゃんとそこはまかせてよ。結界にも反応はなかつた。」

綺礼「ならばよいアサシン。今日はわが師からこの後集まるよう仰せつかつていてる。」

誰が発したのか

「・・・キナ臭いな・・・」

そのことに関して綺礼は反応する必要もないと言つた素振りで踵

を返す。

自分にはまだ有用性がある限り、切り捨てられないし、まずあのアーチャーを倒す手段を探さなくてはいけない。

絶対に勝つのならば、アーチャーとアサシンを組ませることによつて、セイバーを打倒する方法も見つかる。

或いは、セイバーとバーサーカーが組む可能性すらあるのだから、こちらも2組で戦う方が安心で確実に勝つ方法であるということは、誰にだつてわかるからだ。

時臣「ああ、来てくれたか綺礼。キャスターの使い魔を掃討した後にすまない。」

綺礼「いえ、我が師の頼みならば」

挨拶を済ます二人。靈体化した全アサシン達と、靈体化せずに時臣の後ろで立つアーチャー。

アーチャーには絶えず漏れ出る血のにおい。アサシン達も同盟関係であつても警戒してしまう。

時臣「ところで、呼び出した訳なのだが……君個人に対して、私からの贈り物だ。」

時臣が一つの箱を取り出し、綺礼に差し出す。

綺礼「これは……？」

時臣「開けてみたまえ」

開けるとそこには一本の短剣。

時臣「アゾット剣だ。少し早いが……君が遠坂の魔道を修め、見習いの過程を終えたことを証明する品だ。」

綺礼「至らぬこの身に重ね重ねのご厚情。感謝の言葉もありません、我が師よ。」

時臣「……これで私は、最後の戦いに臨むことができる。」

その時、アーチャーから出る濃い殺氣。白い鏡を綺礼でなく、靈体化したアサシン達に向ける。

綺礼「……これは……何の……？」

時臣「アーチャーの宝具には自分の命にストックする、もしくは開

放することができるのだよ、綺礼。アサシン達は強い。だがアーチャーの方が強い。そして同盟を組む必要もなくなる。わかるかね？もうアサシン達の有用性は消えている。あるとすればアーチャーの糧となることだけだ。勿論、君もだ、綺礼。君のその強さは欲しいものだ。

だが、魔道の見習いの過程を終えぬまま死ぬのもどうかと思つてね。」

アーチャー「マスター、御託はいい、さつさとかかって来い。暗殺者共。早く早く早く早く早く早く!!」

「マスターだけは逃がすぞ！」

その一言から姿を現すアサシン達。そして、全力でやらなければ勝てないと判断したのか、一番防御力に優れている者が最初から宝具を展開する。

「インクルシオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

同じ叫び声が館に響く。それと同時に糸が館内に張り巡らされる。否、最初から仕掛けられていたものが合図一つで起動したのだとアーチャーは気づく。

しかし、気づいたのも束の間。糸がアーチャーの胴体を裂く。

アーチャー「・・・くツ・・・はツ・・・ふはは・・・くははははははツ」

裂かれた体から笑い声。その笑い声と共に体が再生していくアーチャー。

「くつそ！何回殺ればいいんだつて！」

糸が舞う。綺礼と主力でない、またはアーチャーでは守備力のなきからすぐ倒されるであろうメンバーは後退するため、鎧の男二人が緑色の髪の青年を守るようにして立つ。

そして遠坂邸の個室にはもう一人の大男。

アサシン達の切り札とも言うべきもので、最大の攻撃力と守備力、スピード、家事スキル、何もかもを詰め込んだ『護衛』。

「スサノオ！奥の手だ！」

遠くから聞こえる自分の主の声。

「了解した。」

スサノオと呼ばれた大男に魔力が集まる。

スサノオ「禍魂顕現！」

スサノオのステータスが飛躍的に上ると同時に、狂化していく。  
「タツミ・・・ラバを連れてマスターと合流しろ・・・アーチャーの野郎本気を出すつもりだ！」

タツミ「わかつた！兄貴もまたあとで合流地点に！」

タツミと呼ばれた青年がラバと呼ばれた緑色の髪の青年を連れて行く。

「当たり前じゃねえか・・・また全員と一緒にだ・・・タツミの成長を見れるんだ、ここで死ぬかよ！」

スサノオ「そのとおりだ、アーチャー、ここで倒れてもうぞ！  
天叢雲剣！」

スサノオの手のひらに魔力が集中し、それが遠坂邸を貫く巨大な剣となり、アーチャーを切断する。

しかしアーチャーはまだ倒れず、黒と白の人間では到底扱うことのできないような銃で反撃してくる。しかし

スサノオ「八咫鏡！」

鏡に銃弾が跳ね返され、それ全てがアーチャーに降り注ぎ、命中する。

アーチャー「・・・・私は・・・化け物だ」

「だからなんだつてんだよ！」

鎧の男が反応し、アーチャーを縦に裂く。

しかしアーチャーの声は館全域から響く

アーチャー「化け物を倒すのはいつだつて人間だ、貴様のような人形ではない」

そして

アーチャー「拘束制御術式、三号二号一号開放！」

スサノオ「ブラート！避けろ！」

アーチャーの元から出る数多の腕がブラートに襲い掛かる。

ブラート「ぐつがああああああああああああああああ！」

インクルシオの頑強さのおかげでブラートの靈基は破壊には至っていないが、それでもインクルシオの防御力を貫いてブラートにダメージが入った、しかも一瞬でのことである。だが、インクルシオの副武装、ノインテーターで防いだこともあり、ダメージは比較的抑えることができたのと同時、吹き飛ばされ、遠坂邸から脱出できたのは運がよかつたとしか言えないだろう。

アーチャー「貴様ではせいぜい足止めにしかならないだろうな、それでも向かつてくるか？人形」

スサノオ「俺は帝具だ、ナジエンダの帝具、宝具でもある・・・だが、それでも俺を人のように扱ってくれるヤツらがいる。答えは一つだ、かかるてこいアーチャー！」

アーチャー「・・・そうか、それでも尚向かつてくる、どこのどの犬の餌とは大違いだ！」

ブラート「チツ！こいつらなんなんだよ・・・これも、アーチャーだつてのかよ」

庭に落とされたブラートはインクルシオが解除寸前のダメージを負いながらも、ノインテーターを構える。

ただし、向かい合う相手は虫、そして多眼の犬。虫には大した強さは感じ取れないが、犬は別格でアーチャーまではいかないがかなりの強さで、負傷したブラートには少し手の余る相手。

「兄貴！」

自分を慕ってくれる弟分、タツミの声だ、ナイトレイドの皆をもじものための秘密基地に集合させ、戻ってきたのだろう。

タツミ「大丈夫か兄貴！ここは俺に任せて、兄貴は皆と合流してくれ！後で俺もスーさんと一緒に！いてえ！」

ブラートがタツミに拳骨をきます。

ブラート「馬鹿野郎！なぜ戻ってきた！あいつは今まで戦ってきた奴らとは段違いだ！もしかしたらエスデスよりも強いかもしねない！」

タツミ「わかってる、だけど俺は・・・あの時よりも力を付けた、何

時までも兄貴にばつか迷惑かけられねえよ！」

タツミ「インクルシオオオオオオオオオオ！」

そしてタツミの纏うインクルシオの姿が変わる。より龍の性質を持つた、悪鬼へと。

ブラーート「タツミ……お前、その姿は……」

タツミ「これが、今の俺の奥の手、すっぽり疲れるけど、英靈になつた今なら前よりも制限なしで動ける！」

タツミが駆ける、その速度は今までの速度を遥かに超え、一瞬で犬の顎を捉え、そして切り落とす。虫が衝撃で斬り飛ばされ、周囲にいた蠢く虫は消えた。が

アーチャー「ふッははははッ！それでこそだ、人間！」

斬り飛ばされたはずの犬がいる。そしてその中に腕、しかも黒鉄の銃。

タツミ「遅え！」

しかし強化されたインクルシオによって、タツミが強くなつたことで、銃弾さえ難なく避ける。そして反撃するとしてみせる。

ブラーート（強くなつたとは思つたが……これほど……戦士としても、男としても立派になつた……だが）

ブラーート「インクルシオに飲まれてる……いや、混ざつちまつたか……」

タツミ「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」  
「うおつ!?」

窓から落ちてくるのは修復途中のスサノオ、そして窓に無数の腕。

スサノオ「ブラーートにタツミか、無事だつたか……？」

タツミ「スーさん!?スーさんがこんなに修復に時間かかるつて……」

アーチャーは!?

スサノオ「100は殺したはずだ……だが……健全のようだ」  
タツミ「ダメージがない俺が殿をやる、スーさんと兄貴は先に行つてくれ。」

スサノオとブラーートは「わかつた」と小さくうなづくと、スサノオの禍魂顯現時の技の一つ、八尺瓊勾玉やさかにのみがたまによつて、瞬間移動かのようない

速度で移動するスサノオと、それにつかまるブラーート。

タツミ「行つたか・・・さて、俺も！」

タツミも以前とは比べ物にならない速度で駆ける。だがアーチャーの犬も速く奔る。

アーチャー「どこに行く？まだ闘争は始まつたばかりだ！ハ」  
どこからともなくアーチャーを打ち抜く一撃。

タツミ「マイン！助かつたぜ！」

アーチャーが再生するほんの少しの時間、しかしその短時間でタツミの姿はもうない。

この夜、結果としてアーチャーは誰も倒せず、孤立した。綺礼も同じく孤立。聖杯戦争がより激しくなるのだろう、と使い魔を通して観ていたウエイバー、そして綺礼は思つた。

綺礼「このままではまずいか・・・仕方あるまい。アサシン、誰でもいい、ライダーとバーサーカーのマスターらしき人物を発見し次第、交渉を開始する。異論はないな？」

銀髪の女性、スサノオのマスターであり、アサシンの根幹なりうる人物が代表して答える。

ナジエンダ「確かに、あの強さは異常すぎる。手が多いに越した事はない。」

あの館に少しだけ残り、糸の結界で逃げるのを少しだけ手伝つたラバと呼ばれた緑色の髪の青年

ラバツク「ナジエンダさんが言うことに賛成。」

黒髪の、赤い瞳をした少女が短く答える

アカメ「私もボスに賛成だ。」

ピンク色の長髪をした少女も同様に

マイン「そうねー、あれブドーなんかよりも全然強いし、助つ人は欲しいわね」

金髪のグラマラスな女性

レオーネ「あれは殴つてどうにかなるレベルじゃなさそうだしな」

チャイナドレスの眼鏡をかけた女性

シェーレ「一度切つても油断ならないんじや困りますよね」

赤いリボンの付いたヘッドホンを付け、棒のついた飴を咥えた女性  
チエルシー「私は直接あんなのとは戦えないし、マスター暗殺だけ、  
けどあればバランス崩壊もいいところって感じ」

そして戻ってきたタツミとブラーート、そしてスサノオ達3人  
タツミ「あれば普通に戦つてどうにかなる相手じゃないのはよくわ  
かつた。ここもいつまで持つか……」

ブラーート「タツミと同意見だ、それにまだ力を隠し持つてるんじや  
ねえかと俺は思うぜ」

スサノオ「禍魂顯現でさえようやく互角といったところだ、何より  
あれの弱点がわからない。正攻法はどんなモノにある筈なのだが  
が・・・戦つてさえわからない。」

今綺礼には自分のサーヴァント達の助言を信じるしかない。父は  
時臣に何かされている可能性もある。だとすれば、アサシンに調べさ  
せていたバーサーカーのマスターは時臣を恨み、ライダーのマスター  
は魔術師としても人間としてもまだ未熟な存在で勝つこと、生き残る  
ことは厳しい。ならばこれを逆手に取り、少しでも自分達の力にする  
べきだと考えれる。

この時点で考えうるべきはキヤスターの排除時、手を組み少しでも  
友好関係を築くこと。そして父を守り、あの量の令呪を渡したとき、  
全てのサーヴァントはアーチャーに勝てないだろうと考えがつく。  
ラバツク「なあ、マスター。セイバー手伝つてもらえばいいんじや  
ないの？あれも化け物だしさ」

綺礼「・・・・・・・・・

ラバツク「あれ？なんか俺変なこと言つた！？」

綺礼の頭に考えていたことが全て吹っ飛び、衛宮切嗣のことを考え  
てしまう。

綺礼（あの男に・・・？いや、この状況だ、全てのマスターに呼び  
かけるという建前で衛宮切嗣とも・・・）

この夜、綺礼は切嗣との接触を考え続け、結局朝まで眠れなかつた  
のであつた。

## アサシン、アーチャーのステータス紹介

### アサシン

#### 「ナイトレイド」（主にナジエンダを中心とする）

暗殺者ギルド。全員が帝具（宝具）を持ち、全員が並のサーヴァント以上の強さで構成されている。そのため、ボスであるナジエンダを縁として召喚されたという制限があるメンバーは、ナジエンダが死亡した時点で全員が死亡と判定され、英靈の座へと還されてしまう。

尚、スサノオを除く全員が気配遮断C以上を持つていること、ステータスは基本帝具を使用した形で戦闘を行なうため、帝具を使用したステータスになっている。帝具の使用の際にしか魔力消費は起きない。

#### 「ナジエンダ」

特殊な例として、スサノオが元マスター（男）と似ているということ、男性みたいという団員が密かに思っていることから「麗しの風貌」スキルを得てている。

ただ、女性としても好かれている（ラバックに）ことからランクは下がっている。尚義手により持ち得ない筈の殺戮技巧のスキルも持つ。また、自身は戦闘を滅多に行なわないが、戦況を見渡す戦術眼は高く、数万の反乱軍を率いたことから扇動、軍略スキルも持つ。扇動は大多数で行なわれる時に発動する（カリスマと同ランク）

筋力	B +	魔力	D
耐久	D	幸運	B +
敏捷	C	宝具	A ++
宝具			

#### 「電光石火スサノオ」 ランクA++

##### 対人宝具

ナイトレイドの一員として活躍する。宝具でもありメンバーでもある。

詳しい情報は下記を参照

「？」 ランクA++

スキル

気配遮断 B+

騎乗 A+

カリスマ A+

麗しの風貌 D-

鑑識眼 B

殺戮技巧（道具）E-

（扇動）

軍略 B

「アカメ」

あらゆる戦況下で戦い生き残るため、技術的な縮地として最高ランクのAを獲得している。

自身の帝具がない状況でも戦うことを想定し、相手との力量を測ることで仕切り直しスキルも心眼（真）も獲得している。一度竜の命だけを斬つたことから竜殺しのスキルを獲得できる。（薬使用時、相手に触れている時）

筋力 B

魔力 D

耐久 B

幸運 D

敏捷 A+

宝具 A+

宝具

「一斬必殺 村雨」 ランクA+

対人宝具

一度斬れば相手には呪毒が入り、必ず殺す。

かすり傷でさえ呪毒は相手を蝕む。使用者に対しても効果はある。

奥の手が存在し、発動すればステータスが1ランクアップする。

「強化薬（帝具によるブレンド）」 ランク D

対人宝具

山で育つたアカメの第六感（心眼と仕切り直し）が消えてしまう代わり、ステータスを大幅に強化することができる。尚1錠しかなかっため、使いどころが難しい物。

スキル

気配遮断 A+

狂化 E-

頑強 C-

千里眼 E

仕切り直し C

縮地 A

心眼（真） C 冷静沈着 B

（竜殺し） 自己暗示 C

コンビネーション B ↴ A

「レオーネ」

帝具を使い続けることでステータス変動。死んだフリなどで戦闘から逃げる、回復する等で戦闘続行スキルを獲得。（仕切り直しも含まれる。）

筋力 A	魔力 E
耐久 A	幸運 D
敏捷 A +	宝具 B
宝具	

「百獣王化ライオネル」 ランクB

対人宝具

奥の手は「獅子は死なず」。

非常に高い治癒力を持ち、ラバツクの帝具と合わせることで腕が切断されても治すことができる。

筋力、耐久、敏捷ステータスが大幅に上げれる。また、野性の本能を得られる（強化する）。

ちなみにこの帝具の使用の連続によりなぜかレオーネ自身のステータスは常時上がっていく。

スキル

気配遮断 A + 野性の本能 A +

頑強 A +

狂化 C —

戦闘続行 A +

怪力 A

コンビネーション B ↴ A

「メイン」

タツミと一緒に戦うことによつて少し戦闘能力が上昇する。（帝具の威力が上がる。）

帝具に付く「スカウター型スコープ」によつて千里眼（射手）を得ると同時に、自称射撃の天才であるため自己暗示と併用することで射撃のスキルまで変動可能。

筋力	E	魔力	C
耐久	D	幸運	A
敏捷	D	道具	A
道具			

### 「浪漫砲台パンプキン」 ランク A

自身の精神エネルギーを衝撃波として打ち出し、自身の感情に威力が左右される。そのため、使用者がピンチになれば威力も増していく。つまり、感情が昂ぶることがこの帝具の真骨頂となる。

奥の手はないが、アタッチメントを変えることでマシンガンタイプ、極太のビームタイプと様々なタイプを状況に対応できるようになっている。遠中近どちらも対応可能。

しかし、高エネルギーを撃ち続けるとオーバーヒートを起こす。レオーネ曰く「めんどくさい帝具」。

### スキル

気配遮断	A	自己暗示	C
千里眼（射手）	C++	射撃	A++
心眼（偽）	D	コンビネーション	B~A

### 「タツミ」

帝具はブラーントと同じ帝具。使い続けることでステータスが変動。様々な環境に適応可能。年上の女性に知らず知らず魅了をかけている。（愛の黒子と同じなため、対魔力が高ければ防げる。）が、当てはまる人物と当てはまらない人物がいる。尚マインと一緒に戦うことで戦闘能力が少し上昇する。あることがきっかけで「奇蹟」スキルを持つ。これもまた無自覚。スキルの大半はインクルシオの覚醒により獲得していく。

筋力	B~A++	魔力	D
耐久	B~A++	幸運	B+
敏捷	C~A	道具	B~A++
道具			

### 「悪鬼纏身インクルシオ」 ランクB~A++

### 対人宝具

鎧型の帝具。ブラーートとは少し違う形をしており、また、タツミの場合は進化していく、つまり無茶をしてインクルシオと混ざる状態になる。

使い続けると宝具のランクが変動、ステータス、スキルまで変動していく。

副武装のノインテーターまでも変化していく。

奥の手は透明化。しかし透明化しても気配は消せないのでサー・ヴァント化した今はそこまで重要視されない。

気配遮断スキルを少しだけ上昇可能、対魔力を獲得可能。

### スキル

対魔力 C ↘ B —

怪力 B ↘ A ++

適応すれば) A ++

カリスマ D

頑強 B ↘ A ++

年上キラー D

巨獣狩り A

コンビネーション B ↘ A

奇蹟 B

狂化 B ↘ EX

鋼鉄の決意 B

### 「ブラーート」

タツミの兄貴分であり、同じ帝具を用いる。ナイトレイドの主力。周囲に気を配ることで気配感知、圏境スキルを獲得し、インクルシオの奥の手、透明化によつて非戦闘時は気配遮断Aを獲得できる。インクルシオを完全に使いこなしているためステータスの変動はない。

筋力 A + 魔力 E

耐久 A + 幸運 C

敏捷 A + 宝具 A +

宝具

「悪鬼纏身インクルシオ」 ランク A +

対人宝具

タツミと同じ帝具。しかし形が少し違うが、あれはタツミにインク

ルシオが変化、適応したため。

副武装のノインテータを遠近どちらも使いこなし、タツミと違いインクルシオを正しく使用しているため、インクルシオの進化、適応は起きないが、既に完成された強さなのでランクはA+となっている。インクルシオは一定のダメージを受けると解除される。

### スキル

心眼（真）	B	頑強	A
圏境	B	対魔力	B
戦闘続行	B	気配感知	B
殿の矜持	C	コンビネーション	B ↴ A
勇猛	A		

### 「電光石化スサノオ」

ナジエンダの帝具でありナイトレイドのメンバーの一員かつ『奥の手』。

要人警護を目的として作られた帝具であり、防衛戦ではステータスが上昇する他、奥の手による狂化も可能。

ライオネルを上回る回復力（再生力）、帝具なため毒が効かない、攻撃力の高さ、観察眼、最高峰の家事スキル等、最高峰のスペックを持ち、その「なんでもできる」ことから専科百般スキルを持つ。

武器は回転刃の内蔵された長柄の槌で、奥の手「禍魂顕現」時には武器が「天叢雲剣」という巨大な剣になり、また反射能力を持つ「八咫鏡」、ステータスを大幅に上げる「八尺瓊勾玉」等がある。胸の核が露呈され、それを破壊されると死亡する。（禍魂顕現により再生可能だが負担になる。）

ブラーートやシェーレとは面識がなかつたが、召喚されるときには仲良くなつてている。

筋力	A ↴ A + + +	魔力	A
耐久	E X (コアE)	幸運	C
敏捷	B ↴ A + + +	宝具（自身が宝具であるため無し）	
スキル			

戦闘続行	A+	頑強	EX
変化	EX	自己改造	EX
縮地	A+++	対魔力	B
気配遮断	D	専科百般	C
観察眼	B	コンビネーション	B~A
スキル			
気配遮断	A	陣地作成	C
気配感知	C	戦闘続行	C
コンビネーション	B~A		

「ラバツク」

糸の帝具使い。主に糸の結界で警護役をするが、ラバツク自身が戦闘能力が無いわけではなく、並のサーヴァント以上の実力を持つ。（勿論相性などがあるので、絶対ではない）

宝具の汎用性が高く、それゆえに使用者に大きく左右される性能。しかし、ラバツクは持ち前の器用さで宝具を使い、様々なスキルを獲得できる。

筋力	C	魔力	C
耐久	C	幸運	D
敏捷	B	宝具	A+
宝具			

「千変万化クローステール」 ランク A+

糸の帝具。糸の結界を張つたり、レオーネとの帝具と共同で使うことで切られた腕を縫合することもできる。

使用者の実力によつて大きく能力が変動するが、ラバツクはこの帝具を使いこなしていることから、この帝具が持ちうる最高ランクを獲得している。

尚、かなりの奥の手があるらしいが、本編にて未使用なため、使用不可。

しかし切り札、「界断糸」という特別強力な1本の糸があり、それを用いて戦う。

## 「チエルシー」

戦闘能力は皆無だが、自身の帝具を用いることでマスターの暗殺を目的としたメンバー。

アカメと同じ位に暗殺任務をこなしているため、かなりの腕。

劇中では最悪といつていいほどの死に方をする。

ナイトレイドにはスサノオと同様に補充メンバーとして加入したため、面識のないメンバーもいたが、召喚時には仲良くなっている。

筋力	D	魔力	C
耐久	E	幸運	C
敏捷	B	宝具	A
宝具			

## 「変身自在ガイアファンデーション」 ランク A

色々な物（人や動物）に変身することができる化粧品型の帝具。しかし、この帝具は変身した者と同じ戦闘能力になるわけではなく、あくまでも使用者本人に由来する。

そのため、相手のことをよく理解した上で使わなくてはいけない。

スキル

気配遮断 B ↴ A コンビネーション B ↴ A

変化 A

## アーチャー

### 「アーカード」

真祖の吸血鬼だが、この世界とは違うためまずこの世界の真祖とは違う。

ヴラド三世なのだが、ランサーやバーサーカーのクラスで現界するヴラド三世ではない。

基本銃で応戦するタイプであり、白い銃、黒い銃の二挺拳銃で戦う。その銃は人間が扱える代物ではないため、実質アーカード専用である。

宝具を使用するには令呪1画が必要になる。しかしそれは魔術の

隠匿とは大きくかけ離れたものであり、それを使えば、恐らく冬木の町は彼に沈むことになる。

因みに、召喚時のアーカードのストックは342万4867+1人であり、作中最強時の時。

?? 「どこにでもいるしどこにでもいない」という存在で閉じ込めることは不可能。戦闘時は使用不可の制限。

筋力 A	魔力 C
耐久 EX	幸運 C
敏捷 A	宝具 EX

### 宝具

「454カスールカスタムオートマチック」 ランク D

白い方の銃。装弾数は6発+1となっているが、なんのおふざけか、100万発入りのコスマガント化している。

銃弾には、対化物・対吸血鬼用になつてているため、アーカードの世界での吸血鬼にも効き、この世界の吸血鬼には「対吸血鬼」としての概念があるため、ダメージを与えることができる。(当たれば)

尚、約4kg。

「対化物戦闘専用13mm拳銃ジャッカル」 ランク B

黒い方の銃。装弾数はカスールと変わらない。しかし、威力が段違いであることから、ランクが格段に上がっている。尚、16kg。

「棺」ランク  
[拘束制御術式]  
Unkown

ランク C B A

ランクははずしていく数に応じてのランク。

制限を解除することで戦闘能力の上昇、使い魔の使役、無機物同

化等、吸血鬼本来の実力を得る。

尚、使い魔には完璧な吸血鬼となつた者がいるが、アーカードは呼びたがらない。

「?」ランク EX

アーカードの最後の切り札とも言うべき宝具。

「棺」が必要になる。令呪を使用しなければならない。

等、用意するものが必要になる。

### スキル

無辜の怪物	A	魔眼	B
恐怖の叫び	C	幻術	B
怪力	B ↴ A + + +	加虐体質	C
吸血	E X	戦闘続行	C
対魔力		単独行動	C E X
使い魔	A + D		



せんな

ブラーート「ふん！・・・あと2匹・・・!!」

ブラーートが手で何か小さいものをつかみ、潰す。手のひらにあるのは小さい鬼のようなもので、それを払い、一瞬であつたかうい鬼に肉薄して頭を縦に裂き、つめたうい鬼の胴を貫こうとするが、持つている棍棒で弾かれ

「阿呆かお前、生まれ変わつてやりなおせ」

ブラーートの腕が凍つていく。しかし

ブラーート「この程度の寒さじやあ、俺の中にある熱い炎は消えねえぜ！」

無理矢理つめたうい鬼の顔面を殴り飛ばし、ノインテーターを投擲し、鬼を倒す。

と同時に、迫つてきていた巨大なネコ、足しかない謎の怪生物、ツタンカーメン等、キヤスターの使い魔達を残らず駆逐していく。

凜「・・・すごい・・・助かった・・・のかな」

しかし、後ろに来る謎の獣人。背中に良と書かれた獣人。

凜「やばい！あの手のひらの目を見たら！」

そこに猛スピードでやつてくる車の音。

ライダー「おいおいおいおい！キヤスターの野郎、なんでこんな罪のねえ子供ばかりを！それに俺より早い奴がいるだとオオオオオオ!?」

ライダーが乗つてきた車に轢かれ、潰された良。そして爆発する車が纏めて使い魔達を吹き飛ばす。

ライダー「さあて、そこの鎧男！どつちが早く使い魔を殲滅させるか、勝負だ！ラディカル・グッドスピード・脚部限定!!」

やつてきた高速で走るおばあさんが目にも留まらぬ速さで迎撃し、一瞬で太鼓を持つ大男を蹴り飛ばす。

そして、走つてやつてきた人体模型が破壊される・・・辺りにやつてきた使い魔30以上がライダーがやつてきた瞬間に潰される。

ライダー「これがキヤスターの使い魔か・・・足りない、足りないぞオオオオ！お前に足りないモノオオー！それはアアー！情熱思想

理念頭脳氣品優雅さ勤勉さア！　そして何よりもオオオ!!速さが足りない！」

「さて、アインズ様の言われたとおりに来たら……サーヴァントが2騎が既に到着していたとは……しかも共闘ですか……特にライダーのあの速さは厄介……」

校舎内のキヤスターの使い魔を倒して行く老紳士。悲惨な死に方をしたのか、絶望した顔をしている児童達の顔を少しでも安らかに、と弔いながら救助をしているのだが

「まさか一人もいない、ということは……ん？」

1階の階段下の倉庫に微力な魔力反応。キヤスターの使い魔は上位のモノでなければ魔力感知すらできないのだろうか。と新たに自分が主人に報告することが増えていく。

「誰か、いるのですか？」

倉庫に入ると、そこには姉弟と思われる児童が絶命している後ろに小さな気配。

「私はセバス、ここを救助しようと我が主より命じられました。安心してください。」

セバスと名乗る老紳士からは反応していた魔力針がなぜか反応しないことがわかると、出てくる少女。

凜「あのつ……ありがとうございます……」

セバス「いえ、よく生き残れたものです。それにその手に持つ物は……聖杯戦争に参加する魔術師を家族に持つ方ですね？おそらくアーチャー、遠坂時臣氏の……確か遠坂凜、でしたかな」

凜「ツ！」

セバスが自身の名前と父の名前を言い当て、一応身構える凜。無意味とわかつてはいても最低限の抵抗はしてみせる。が

セバス「いえ、貴女様へ危害を加えることはなさいません。私の方で生存者を100名程、匿っています。どうか避難を。外はサーヴァントと思しき者が2体程暴れており、今は使い魔もそつちの方に気をとられています故。」

凜「いえ、助けてくださった御仁に失礼な態度でした……」

セバス「お礼はこの騒動が終わってからでお願いします。避難場所は屋上です。並の使い魔では突破できぬ結界を張つております。」

凜「あ、あの……セバスさんはどちらへ……まだ生存者を探しているのでしたら！」

セバス「いえ、生存者はもうおりません。最後に回った場所がここですでの……あとこれを、認識阻害のアイテムだそうです。では、私は外に出てきている使い魔を掃討した後、屋上へ向かいます。」

セバスが答えるとすぐに昇降口へ向かい、外へ出る。

凜（屋上……しかも100人も匿つて……おそらくセバスさんだけじゃない、他の人も手伝つてる）

凜はセバスが何者なのかを予想して行くが、見たところ武器は拳。しかしあサシンにあんな人物はいなかつた筈であり、セバスが使い魔だと予想していくと、考えうるのはセイバー陣営。

凜（セイバーは使い魔を生存者探索させて自分は屋上で匿つてることかしら……）

凜が考えながら上に上にと上がつて行く。すると、そこにいたのは剣を持つた人物ではなく長い黒髪をポニーテールにしたメイドだった。

ライダー「チツ！数が多いね！こりやあ」

ブラーート「おいおいライダー！もうバテたか！俺はまだまだやれるぜ！」

お互に競い合いながら使い魔を倒し続ける二人。中には反撃していくレベルの使い魔までいるが、二人は造作もなく処理し続けていると、校舎から黒い執事服を着た初老の大男が歩いてきて、

セバス「お手伝いしましょう」

その一言の後、セバスが立つていた場所にはもうセバスはおらず、ブラーートの後ろにいた顔がついた球体に足だけの使い魔を吹き飛ばす。

ブラーート（またか！今度はセイバーの使い魔かよ……使い魔にし

ちやあ寒氣するぐらいの強さだぜ……ここで倒せるかつて言われて倒せる自信がねえ！」

ブラーート（確かに後ろにはマインがついてる。全員に援護ができるようには高いとこから狙つてる。チエルシーとシエーレもそこでマインを援護してるから問題はねえが……）

ブラーート「援護ありがてえがよ、これが終わつたらすぐさま乱闘つてことはねえよな？ここが終つたら仲間のとこへ行かなきやならねえんだ。ライダーもだ、ここで敵を増やすわけにもいかないからな。騒動が終つたら冬木大橋へ来てくれよ。」

使い魔を倒しながらブラーートはライダーとセバスへ声をかける。キヤスターを倒すための同盟、かつアーチャーを倒すための同盟を組む口約束を今ここでしようとするが

セバス「生憎ですが、私には決定権はございません。それに、我が主は恐らく拒否するでしょう。」

ライダー「同盟は悪くない話だ。こつちに害がなければな！マスター！どうする！」

物陰に隠れていたウエイバーへライダーが話しかけるが、ウエイバーは

ウエイバー「す、好きにしろよ！ボクは賛成だけど！お前が守つてくれるんだろう？」

ライダー「と、言うことだ！今日の夜の冬木大橋だな！こいつら倒したら待つてくれよ！」

そして最後の敵、羊のようなものをセバスが倒して使い魔を殲滅する。

セバス「これで最後、でしおうなあ。では皆様。また合う時は、敵同士であるかと思われますがその時は容赦なくいかせていただきます。」

そうしてセバスは一瞬で学校の最上階まで跳躍して生存者の保護を優先する。

ブラーート「さて、俺達もこうしちゃいられねえ。他に襲われてるとこへさつさと向かおうぜ」

ライダー「そうだな、人命救助は早さが命だ。1分1秒たりとて無駄にはできない。じゃあな！」

そうしてライダーはマスターを抱き上げ、他人の車を自身の車へと変貌させるため、駐車場へと向かう。

ブラーート（出来れば戦いたくない相手だぜ……あの執事もだが俺一人で確実に勝てる敵じやねえ……）

ブラーート「チエルシー……セイバーとの会合頼んだぜ」

チエルシー「うわすつごい何この殺氣……魔力っていうのだつけ……あれ勝てる相手なの本当に……」

ギヤル風の格好をし、棒付きのキヤンディーを咥えるでかいリボンが特徴の子が、荒らされ、結界が張られていたらうAINツベルンの城がある入り口、深山町の西側郊外に広がる森にいる。

ラバツク「大丈夫だつて、ほら、鎧のお姉さんだつて攻撃してこないしさ……あの骸骨達だつて襲つてこないしさ。俺たちの仕事つてアーチャーとキヤスター討伐の同士集めだぜ？ 戰闘目的じゃないんだしさ……」

チエルシーの後ろから声を震わせながらチエルシーとコソコソ話をするラバツク。彼らはアーチャーという強大な敵、キヤスターとう冬木市で起きている大量殺人犯の討伐をするため、恐らく既にアーチャーによつて殺されているだろう言峰璃正の代わりにランサー、セイバー、ライダー、バーサーカーへと同盟を呼びかけている。

しかし、未だ色よい返事を聞けないでいるのだ。

間桐家に居ると思つたバーサーカーはどこにいるのかさえわからぬ。ライダーは走り回り続け、居場所がよくつかめない。ランサーはセイバーとの戦闘で警戒中であること。

チエルシー（そりやアレ以来動きもしないセイバー陣営が一番気になるわよねえ、でもこんなになつてるなんてねえ）

目の前にいるのは複数の悪魔のような使い魔と、でかい鎧。そして

ボロのローブを纏つたミイラのようなものそしてそれを指揮しているのが

「あれ？ お客様？」

薄黒い肌と長い耳、そしてオッドアイを持つ階層守護者。

アウラ・ベラ・ファイオーラ。今はAINZの命令でAINZベルンの森の一部を切り開く作業の真っ最中だつた。

アウラ「例のAINZ様に謁見するつていう？ 見たところアサシンかな？ 2人いるけど・・・これなら一人でも大丈夫かな？」

アルベド「勿論私一人で十分に処理できる戦力。戦力に数える方がどうかしている者共ですが・・・いざとなれば私がこの身を賭してでも」

アウラ「あー、はいはいわかってるって。」

ラバック「なあチエルシーちゃん、ここにいる使い魔とお姉さんとおチビちゃん。同時に相手して生き残れる？」

チエルシー「無理ね。瞬殺される」

アルベド（なぜこのような脆弱な生き物共と手を組む必要が・・・）チエルシーとラバックがコソコソ話しているのを横目でチラと見る。正直なところ、ランサーのように自分達に有利を取れる武器がない。本当に自分達より格上の存在のサーヴァントだとは思えないのだ。

アルベド「ここが旧AINZベルン城。今はナザリック地下大墳墓に・・・AINZ様！」

AINZ「アルベド、案内ご苦労だった。何、あのアーチャーと戦う者達を見たくなつてな。それに、この森もよく見ておきたいのだ。聖杯戦争はもうじき終わつてしまふのだからな。」

突然出てきた漆黒の、いやそれ以上の黒いローブを身に纏う骸骨。だがその魔力の性質はセイバーのものであり、鎧を着けているときどでは段違い。同じサーヴァントとは思えないほどの威圧。それはサーヴァントとして収まっているのが不思議であるほど。

チエルシー「私がチエルシー、こつちがラバック。どつちもアサシ

ンのサーヴァントで、まだ仲間はいるんだけど……」

なぜかチエルシーとラバックを上から下へ見るような目線。気づけばアウラまで戻つてきている。

アウラ、アルベド。他にもスーツを着た悪魔、ランサーと死闘を繰り広げ死亡したはずの使い魔、アウラそつくりの女の子、銀の髪と赤い眼を持つた少女。その誰もがただの使い魔ではないことがわかる。すると、スーツの悪魔が

『平伏したまえ』

突然何を言つているんだとチエルシーが思つた瞬間、チエルシーは地面に頭をこすりつけていた

ラバック「チエルシーちゃん!?」

どうやらラバックは大丈夫だつたらしい。恐らく実力がない者にのみ作用する言霊が何かだろう。

悪魔「アインズ様は君達の姿勢が聞く姿勢でないと思われていたのだ。まあ、片方には効かなかつたようだが……」

チエルシーも抵抗せず、ラバックもそのまま平伏する。正直セイバー陣営と争えばいくらスサノオがいても、インクルシオが2人いたとしても、勝てる見込みはないからだ。2人は、サーヴァントとしても下の位だとということは自覚している。

『頭を上げることを許可する』

アインズ「お前達アサシンがアーチャーと戦う場面はこちらでも確認していた。大方アレと戦うために力を貸して欲しい、か。他にはキヤスターの討伐か……」

ラバック「見てたつて……」

アインズ「……遠隔視の鏡、指定したポイントを見

る。ただ見られていることは気づかれてしまうがね。アーチャー陣営は今のところ一番の要注意陣営なんだ私が見ていたことに気づいているのはアーチャーと角の男だけか。」

アインズ「まあなんにせよ私達と君達は一蓮托生。私がアーチャーを倒す代わりに君達はランサーを取り込むか倒してくれさえすればいい。アレは私を倒しうる武器の一つだからね。万全を期すことに

間違いはない。私は君達を利用し君達は私達を利用しててくれさえすればいいんだ」

チエルシー「・・・ランサーをこつちに取り込めばいいってことですよね？わかりました。」

AINZ「・・・ランサーを取り込めるなら手駒を用意しよう。なんにしても捨て駒の前衛が必要だろう？こちらから前払いで貸し出そう」

すると、AINZが悪魔の男へ目配せをすると、おそらくキャスターが殺害しただろう人々の死体を持つてくる。

AINZ「中位アンデッド作成 デス・ナイト」

AINZが死体に魔力をかける。すると

「オオオオオオオオオオアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

森に複数体のゾンビが出来上がる。しかも剣と盾を持つ巨大なゾンビである。

AINZ「聖杯のおかげか眷属すら靈体化ができるようになつてい  
る。自由に使うといい盾にはなるだろう」

チエルシー・ラバツク「・・・ありがとうございます」

ボスに一応いい報告ができる。けどもう二度と来たくないし、来るとしてもタツミと一緒にいいなあと思うチエルシーだった

ラバツクはただ早くナジエンダに会いたいなあ」としか考えてなかつた。

後ろに靈体化して付いて来るデス・ナイトいでさえ自分達は勝てないだろなあと一抹の不安を抱えながら今回の成果を誇る2人だった

た